

狐狸は心の中に棲む

「週末寸言」原稿 060701

江戸は元禄中の頃、花街吉原が全盛時代を迎えていた時分の話である。そのころ浅草寺の裏手は一面の田んぼ。人呼んで吉原田んぼと言った。花街はその先にあつた。上州沼田藩御家人佐貫十郎左衛門は、名うての遊び人。同じく遊び人の藩医諏訪竹庵と共に、三日にあけず悪所通い。いつものように、暗くなると吉原田んぼを二人で歩いて、いと脇道から女が二人折れ違ふように出てきた。寝待の東の空に上つてきた横顔の美しい小町。楊貴妃も何のそのよな美人。少し眼がくりやが、つて口が心なしか切れ上が、問にすう難点はある。二人は夢中になつた。竹庵の二人同時であつた。どちらへ行かれるかな？ 女達「あら、まあ、身共らと男達「よかつたら、身共らどどこかで寛ぎたいものじゃが。女達「そうですかあ、それで。女達「二人の男と二人の女は別々にカッブルとなつて吉原田んぼを歩いて行つた。

十郎左衛門の組は、今まで見たことも無い洒落た茶屋に上つた。女が言うには、このなつた。女が言うには、この香水風呂は近頃評判なのだ。そうだ。他方、竹庵の方は、まず腹ごしらえと衆議一決、女が行きつけという名代の蕎麦屋に入つてざる蕎麦を注文した。それからどうなつたのか？ 人の記憶は定かではないが、夜の肥だめの中、熟睡し左衛門は、竹庵の食べ残しのざりたし、竹庵の食べ残しの二狐は、吉原田んぼで評判の古狐ケンと古狸ゴンに見事に化かされたのである。毎夜の吉原に出かけた。今度は、毎夜の吉原に出かけた。今度は、遊びでは無い、復讐のためだ。人二日後の夕方、あの時の美人二人が畦道を歩いて行くのが見えた。今宵、こ切つて行くのを追う。二人は一向に気がつかない様子なので近づいて刀を振り上げる。と、さつと飛び退いて、また知らん顔してゆつたりと前方を歩いていく。これを数度繰り返して後、二匹がヤブに飛び込んだ瞬間、先から激しく火花が散つて、先祖伝来の村正の刀は真っ二つに折れた。刀は二匹を切らずに繁みの中、地の蔵の頭を真つ二つに割つていた。頭を騙される者も、狐も狸も詮は無い。刀なんぞで切れる。